The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A Linguistic Study of the Authorship of the West Saxon Gospels
Author(s)	小塚, 良孝
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44852
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	小　塚　良　孝（こづか　よしたか）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　18844　号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学　位　論　文　名	A Linguistic Study of the Authorship of the *West Saxon Gospels* （言語分析に基づく *West Saxon Gospels* の翻訳者像の考察）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　沖田　知子 （副査） 教　授　木村　健治　　助教授　渡辺　秀樹

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、古英語訳福音書 *West Saxon Gospels* (c. 1000) の Authorship（翻訳者像）を、同テキストの語彙と統語法の分析に基づいて考察する実証的研究である。以下、章立てに沿ってその概略を示す。

Chapter 1 : Introduction

本章では、主に論文の目的、関連する先行研究、使用する資料について述べる。

現代まで伝わる古英語訳福音書には、*Lindisfarne Gospels* (c. 950)、*Rushworth Gospels* (c. 975)、*West Saxon Gospels*（以下 *WSG*）、の三つがある。この内、前者二つについては、写本内の記述から、翻訳者の人数、名前が明らかになっているが、*WSG* の翻訳者に関しては記録が何も残っておらず、不明である。本研究では、この *WSG* の翻訳者像を言語分析を手がかりに考察する。

WSG の翻訳者に関する論争は、Drake (1894) に端を発する。彼は、各福音書が言語的に異なる特徴を持つことを指摘し、そのことから、*WSG* は二人（①マタイ伝、ヨハネ伝　②マルコ伝、ルカ伝）もしくは三人（①マタイ伝　②マルコ伝、ルカ伝　③ヨハネ伝）の翻訳者による共作であろうと推測した。しかし、この論は、後に Bright (ed. 1904)、Olsan (1973) などにより退けられた。その理由は、論拠である福音書間の言語的相違の多くが、証拠として質量共に不十分であったことにある。彼らは、Drake の論を批判する一方で、単独説を支持したが、それに対する積極的な証拠は殆ど提示しなかった。このような厳しい批判を浴びた一方で、Drake の複数説は、Raith (1951)、Liuzza (ed. 2000) など幾つかの研究から支持も受けた。これらの研究は、先の Drake の主張に沿う言語的相違を他にも指摘し、複数説を補強した。しかし、どれも決定的な証拠は提出できてはいない。以上のように、*WSG* の翻訳者の人数に関して、単独説と複数説の二説がこれまで唱えられてきたが、いずれも証拠不足で、まだ確立されるには至っていない。本論文では、福音書間、特に、ヨハネ伝とその他の三福音書（マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝のいわゆる共観福音書）との間の際立った言語的相違を示し、複数説を支持する議論を行う。

本研究の資料としては、*WSG* については、最も古く、また失われた原本に最も近いと考えられている Corpus MS のテキスト (Skeat ed. 1871-87)、ラテン語テキストには、R. Weber 編纂の *Vulgate* (ed. 1996) を用いる。*WSG* のラテン語原典については不明だが、Liuzza (ed. 2000) の詳細な研究により、Weber 版 *Vulgate* は、想定される原

典とそれほど違いがないことが明らかとなっているので、本研究で比較資料として用いることに特に問題はないと考えられる。

Chapter 2 : Method and Evidence for Authorship Study

本章では、*WSG* の言語分析に先立ち、古英語文献に関する Authorship 研究の方法論について考察する。前半では、幾つかの作品（*Beowulf* など）に関する Authorship 研究を概観し、どのような手法、証拠に基づいて Authorship の推定がこれまで試みられてきたか、また、言語的側面から Authorship を論じる場合、どのような点に注意せねばならないかを見る。そして、この先行研究回顧を通じ、言語的側面から古英語文献の Authorship を論じるには、最低限、次の四点に配慮せねばならないことを確認する：①ラテン語の影響（考察対象がラテン語文献の翻訳、翻案の場合）、②写字生の影響（特に考察対象が著者自身の手による原本でない場合）、③内容と言語の関係（特にジャンルが明らかに異なる文献を扱う場合）、④証拠の量。

後半では、前半の考察を基に本研究の方法論を詳しく論じ、本研究が妥当な方法論に基づいてなされていることを示す。

Chapter 3 : Syntactic Differences between the Four Gospels in *WSG*

本章では、前半で語順、後半でラテン語統語構造の翻訳法に関する福音書間の相違を論じる。

語順については、前置詞、動詞修飾副詞要素、動詞の目的語の配置を取り上げ、ヨハネ伝と共観福音書の間に特に顕著な相違が見られることを示す。前置詞の配置に関しては、*to* とその目的語、共起する動詞の三要素の語順を扱う。この調査から、共観福音書に比べ、ヨハネ伝の配列法が強く制限されていることを示す。例えば、*to* とその目的語の語順については、共観福音書では、*to* は目的語の前後どちらにも現れるが、ヨハネ伝では、常に前置される。動詞修飾副詞要素については、四種の副詞要素（句副詞、*to*-phrase、前置詞的副詞、場所の副詞）と主語、動詞の語順を調査する。この比較から、ヨハネ伝だけが、主節で副詞要素を定形動詞の前に置く語順をほぼ完全に避けていることが示される。また、動詞の目的語の配置については、SVOX、SVOO の二つの構文における語順を扱う。この比較からは、ヨハネ伝では、他の福音書に比べ、主節で目的語を定形動詞の前に置く語順の使用が限定されていることを示す。以上の観察から、ヨハネ伝では、共観福音書に比べ、語順がかなり制限されていると論じる。これらの福音書間の相違に関しては、ラテン語原典その他の影響は特に認められないので、同一の作者によるとすれば、極端な統語的、文体的変化であると言える。

翻訳法の相違については、ラテン語部分表現と不等比較表現の翻訳を取り上げ、共観福音書がヨハネ伝に比べ、直訳的であることを示す。部分表現については、二種類のラテン語部分表現（前置詞 *de/ex* による表現、部分属格）の翻訳の調査から、いずれの福音書も翻訳には主に *of* か属格を用いるが、その選択傾向がヨハネ伝と共観福音書では明らかに異なることを示す。つまり、共観福音書ではラテン語の表現に沿って二つの構造にある程度使い分け（*de/ex* →*of*、属格→属格）がみられるが、ヨハネ伝ではラテン語に関わらず専ら属格が用いられる。不等比較表現の翻訳については、*quam* ‘than’ 構造と、奪格構造の二種の不等比較表現の翻訳を分析する。この調査から、共観福音書はラテン語の構造により翻訳の傾向が異なる（*quam* 構造→*þonne* ‘than’ 構造、奪格構造→与格構造）のに対し、ヨハネ伝はラテン語の表現に関わらず一貫して *þonne* 構造を用いることを示す。以上の考察において注目されるのは、上記相違を説明するような原則（共起語句との関係など）が特に見出されないこと、そして、ヨハネ伝では避けられる構造（部分の *of*、与格比較）は共に *WSG* が書かれた当時（c. 1000）は使用が極めて稀であったことである。これらのことから、共観福音書の訳者は、ヨハネ伝の訳者と異なり、英語としての自然さよりも原典に対する忠実さを重視していたことが指摘される。

Chapter 4 : Lexical Differences between the Four Gospels in *WSG*

本章では語彙に関する福音書間の相違を論じる。具体的には、①特定ラテン語語彙、フレーズの翻訳、②類義語の使い分け、の二点に関する相違を論じる。前者については、*autem* ‘but, indeed’、*enim* ‘for, indeed’、*ergo* ‘therefore, then’、*daemonium habere* ‘to be possessed by a demon’、*castellum* ‘town’、*mittere* ‘to send、throw’、

fructus 'fruit' の翻訳に関し、特にヨハネ伝と共観福音書の間に大きな相違が見られることを示す。この内、*daemonium habere*、*castellum*、*mittere* の翻訳については、単に訳の傾向が異なるだけでなく、共観福音書の訳がラテン語の影響を強く受けたものであることが観察される（例えば、*daemonium habere* の翻訳に、共観福音書は *deofolseocnesse habban* という逐語訳的な表現を多用するが、ヨハネ伝はこの表現を用いない）。

類義語の使用に見られる四福音書の相違については、四組の類義語（*faran/feran* 'to go'、*cweðan/secgan* 'to say'、*clypian/hryman* 'to cry out'、*betwynan/betwux* 'between'）の選択、語法に関してヨハネ伝が異質な特徴を持ち、その特異性には、意味、コロケーション、ラテン語の影響といった、同一の作者の意図的な変化を示唆するような要因が見当たらないことが示される。また、四組の類義語の内、*faran/feran* 'to go'、*cweðan/secgan* 'to say' に関しては、単にヨハネ伝と共観福音書の選択傾向が異なるだけではなく、ヨハネ伝の語法が共観福音書よりも保守的であることであることも示される（例えば、*cweðan/secgan* については、直接話法の導入における両者の選択に関し、ヨハネ伝は保守的である。後期古英語では、直接話法の導入には *cweðan* が専ら使われ、*secgan* はまだ稀であったが、共観福音書は *secgan* を多用する）。

Chapter 5 : Concluding Remarks

本章では、三、四章の調査結果（本章前半で要約）に基づき *WSG* の翻訳者像を論じる。

ここでは、まず、*WSG* の言語的相違の原因として考えられる三つの可能性（①写字生の影響、②同一の作者の言語変化、③複数の翻訳者の言語的相違）を検討する。その結果、①に関しては、写本の比較の結果から、②については、相違の大きさや突発性（多くの点でヨハネ伝は急に言語が変化する）、福音書間でスタイルを大きく変える要因が特に見当たらないことなどから、それぞれ可能性は低く、③の可能性が最も高いと論じる。そして、Drake (1894) 等が主張する複数説を支持するとともに、先行研究では指摘されていない次の三点を結論として主張する：

(1) その明らかな異質性から、ヨハネ伝の訳者が共観福音書（特にマルコ伝）の訳者と異なる可能性は極めて高い。
(2) 共観福音書については、ある程度の相違もあるが、それ以上に言語的類似性、共通性が顕著であることから、その翻訳者が同一である可能性は十分考えられる。
(3) ヨハネ伝と共観福音書の間には、言語だけでなく、聖書翻訳に対する態度についても大きな隔たりが認められる。ヨハネ伝訳は原典の影響が弱く、当時の英語として自然な表現、語法、単調な文体を好むことから、その訳者は、英語としての理解のし易さ、読み易さを重視していたことが窺える。それに対し、共観福音書は原典の影響が強く、統語法が変化に富むことから、その翻訳者は、英語としての読みやすさよりも、原典に対する忠実性や聖書の荘重さといったことを重視していたことが窺える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、古英語訳福音書 *West Saxon Gospels* (c. 1000) を統語法と語彙の両面から分析することにより、ヨハネ伝とその他の共観福音書との間に際立った言語的相違があることを実証的に明らかにし、複数翻訳者説を論じているものである。

West Saxon Gospels の翻訳者像についての本格的な研究は、２人ないし３人という複数説を唱えた Drake (1894) に始まったが、本論文ではヨハネ伝の翻訳者が異なることを言語的に精密に実証している。統語法においては語順とラテン語統語構造の翻訳法に関する手法の違い、語彙では特定ラテン語語彙やフレーズの翻訳および類義語の使い分けに着目し、独自に収集した用例を駆使して、説得的に論を展開している。とくに従来、綴りや語彙からのアプローチが主であった古英語における著者問題研究に、統語的観点を新たに導入し、すぐれた成果を見出した点は、高く評価されるところである。また、ラテン語福音書 *Vulgate* を参照しながらヨハネ伝と共観福音書との言語的相違の用例を丹念に収集している労作性、用例の分析と位置づけの明快性、独自に収集した証拠に基づいて複数翻訳者説へと導く論理性、そして何より、完全屈折であった古英語において語順の選択に着目し、さらに英語としての自然な表現の

選択から聖書翻訳に対する姿勢の違いへと帰結させた独創性は、特筆に価する。

本論文では、ラテン語から古英語への翻訳が中心に論じられているが、さらにコイネー・ギリシア語の原典などにまで遡り、ヨハネ伝の文体特徴の継承について検討する必要もある。しかしながら、これは今後の研究に新たな機軸を打ち出すために期待されるものであり、本論文が主張する *West Saxon Gospels* におけるヨハネ伝の翻訳者像を損なうものではない。

よって、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認める。